

## 246 <sup>99m</sup>Tc-HMPAO SPECTにて高集積を呈した急性小脳炎の1例

恵谷秀紀、金 奉賀、中 真砂士、木下直和、額田忠篤  
(国立大阪南 循科、臨床研究部)

松岡利幸(国立大阪南 放科)

急性小脳炎の成人例での報告は極めて少ない。今回、成人例の急性小脳炎に<sup>99m</sup>Tc-HMPAO SPECTを施行し、小脳に高集積を認めたので報告する。症例は44才女性で頭痛、ふらつきにて受診、臨床所見(病歴、小脳症状)と髄液所見より急性小脳炎と診断した。X線CTでは異常所見を認めず、<sup>99m</sup>Tc-HMPAO SPECTで小脳に著明な高集積を認めた。急性小脳炎の診断は従来病歴、神経学的所見、髄液検査などによりなされ、X線CTでは通常変化を認めないとされている。今回、<sup>99m</sup>Tc-HMPAO SPECTにて小脳に高集積を認めたことにより、本法の急性小脳炎における補助診断法としての有用性が示唆された。

## 247 血液透析患者における局所脳血流量の測定 小野志磨人、森田浩一、永井清久、塚野信昭、野村信介、大沢源吾、福永仁夫(川崎医大 核、腎臓内科)

慢性腎不全(CRF)のため血液透析中の患者は高齢化が進み、脳血管障害を合併する症例を少なからず経験する。CRF患者は通常の脳血管障害患者に比しヘマトクリットが低値である特徴を有し、脳循環に関しては特異的な所見を呈する可能性がある。今回我々は、CRF 15例に対し、<sup>123</sup>I-IMPを用いた局所脳血流(rCBF)の測定を行い、測定時のオクタノール抽出率など各種パラメータを検討したので報告する。オクタノール抽出率など各種パラメータは通常の脳血管障害患者と有意な差を認めなかった。大多数の症例ではrCBF値の低下は患側だけでなく健側においても認められ、動脈硬化性病変が両側性に存在することが示唆された。

## 248 Migraineにおける脳血流量の変化 —<sup>99m</sup>Tc-HM-PAOによる評価—

犬上 篤、小川敏英、藤田英明、下瀬川恵久、畑澤 順、伊藤 浩、菅野 巖、奥寺利男、上村和夫(秋田脳研 放)

Migrainous stroke中の脳血流量の変化についての報告は少ない。今回、閃輝性暗点に引き続いて片頭痛を呈する症例に対してHM-PAOによるSPECT検査を施行する機会を得た。被験者は44才、男性で、18才時より閃輝性暗点に引き続く片頭痛を経験している。方法は、閃輝性暗点出現中に<sup>99m</sup>Tc-HM-PAO 555 MBq (20mCi)を静注し、約50分後にSPECTを撮像した。更に別の日に、暗点後の頭痛の最中に同様にHM-PAOを静注しておいて、SPECT像を得た。正常時と比較して暗点発作中は後頭葉の血流量が低下し、頭痛時は血流量は増加していた。以上について若干の考察を加えて報告する。

## 249 貧血と<sup>123</sup>I-IMP SPECTにおける局所脳血流との関係について

山尾房枝、矢形智絵、申昇求、山尾哲(倉敷中央病院 内科)  
長木昭男、小原耕一、山本修三、河原泰人(同 放射線科)

貧血と<sup>123</sup>I-IMP SPECTにおける局所脳血流との関係について検討する。対象は、頭部MRI及び神経学的に異常所見を認めない鉄欠乏性貧血、腎性貧血などの患者12例で、対照として年齢を一致させた健常者、末梢性ニューロパシーなどを用いた。<sup>123</sup>I-IMP SPECTは<sup>123</sup>I-IMP 222 MBq 静注30分後から回転型ガンマカメラを用いて行い、<sup>123</sup>I-IMP 静注と同時に5分間持続的に動脈採血を行って、Kuhlらの方法に従い局所脳血流を算定した。得られたSPECT像のtransaxial imageにおいて小脳、前頭・側頭・頭頂・後頭葉、基底核、視床に関心領域を設定し比較した。貧血患者では、脳全体で血流値は増加し、病態評価の上で臨床データを充分考慮する必要があると思われた。

## 250 脳死患者の脳血流シンチグラフィ-厚生省脳死判定基準との対比-

土田龍郎、定藤規弘、西沢貞彦、的場直樹、藤田透、玉木長良、小西淳二(京大 核)、米倉義晴(同 脳病態)

[目的] 脳死判定における脳血流シンチグラフィの有用性について検討する。[対象] 1991年1月以降に臨床的に脳死と判定された7例に対しTc-99m HMPAOによる脳血流シンチを施行した。[結果] 6例において脳内にRIの集積を認めず、臨床上の脳死判定を支持する結果となった。しかし、1例のみではあるが、脳死判定基準を満たしながら脳血流が存在した症例を経験した。[考察] 現在、脳血流シンチは厚生省基準において補助検査としての立場に置かれているが、脳死判定後の生存の可否について、文献的にも生存しえた例が存在し、また、検査としても非侵襲的で本検査は脳死判定の確認検査として重要であると考えられた。

## 251 IMP SPECTによる若年者と老年者における脳血流分布の局所的相違について

新井 久之、羽生 春夫、阿部 晋衛、浅野 哲一、高崎 優(東京医科大学老年科)  
鈴木 孝成、阿部 公彦、網野 三郎(同 放射線科)

健常者に関する脳循環動態の検討は、N<sub>2</sub>O法やPETを用いた研究により多くの成績が挙げられている。今回我々は、IMP SPECTを若年群及び老年群に関して施行し、前頭葉優位な血流分布を中心に半定量的検討を加えた。

SPECTはIMP 222MBqを投与し、シーメンス製ROTA CAMERAを使用。データ処理にはSCINTIPAC2400を用いた。若年群では、相対的に前頭葉において血流が高値であるのに対し、老年群では低値を示す傾向が見られた。また、知覚運動領や側頭頭頂葉においては、逆に若年群では血流が低値を示し、老年群では高値を示す傾向が見られた。